

BI (ビジネスインテリジェンス) 革命

NTT 出版 239 頁 2009 年 2,200 円

『BI (ビジネスインテリジェンス) 革命』……刺激的で挑戦的なタイトルである。

その実、本書は、ビジネスインテリジェンスの活用を推進する専門家集団による、ビジネスインテリジェンスの啓蒙的ビジネス書であり、堅実で、決して奇をてらったものではない。理論的な研究を好む研究者や実務家が多い学会の学会誌になぜビジネス書の書評が掲載されるのかと疑問をもたれるかもしれない。しかしながら、本書は、ノウハウを扱った巷にあふれるビジネス書とは一線を画しており、ビジネスと数理的思考、さらには、ビジネスへの数理的方法の適用の重要性を説く興味深い一冊なのである。

そもそもビジネスインテリジェンスとはいかなるものか。本書では、「企業内外に散在する膨大なデータを分析して、経営意思決定に活用する IT システム、取り組み、方法論、管理手法を総称するコンセプト」と定義している。蓄積されたデータ (情報) を分析し、得られた事実や知見をビジネスに積極的に活用する。一見、自然で当たり前と思える考え方である。これに類するコンセプトはこれまで数多く存在した。ドレスナーがビジネスインテリジェンスというコンセプトを提唱してから 20 年ほど経過しているが、ようやくビジネスインテリジェンスを活用する時代が到来したというべきなのであろう。実際、「ビジネスインテリジェンス」や「BI」をキーワードにネット検索をすれば、ビジネスインテリジェンスが、特にビジネスの現場で、ホットなトピックスであることに気づく。

本書では、ビジネスインテリジェンスに関するさまざまな取り組みや活用方法が紹介されている。はじめに、ビジネスインテリジェンスに注目が集まるようになった背景が紹介されている。そこでは、データウェアハウスをはじめとする情報基盤や統計分析、マイニング、シミュレーションに代表される情報分析基盤の整備が挙げられている。過去の類似のコンセプトが花開かなかった原因がここにある。ビジネス環境の整備が進んだ現代においては、競争力の源泉は、蓄積された情報から事実や知見を抽出し活用するステージに移

っている。本書では、情報活用のステージを、利害関係の及ぶ範囲と、業務やマネジメントの革新の程度の 2 つの軸で整理し、それぞれの領域で情報活用を実践するためのビジネスインテリジェンスの類型を提示している。例えば、パフォーマンス管理とよばれる課題解決レベルの領域では、業務の「見える化」を目的とした集計分析型ビジネスインテリジェンスや、「仮説検証」をベースとした発見型ビジネスインテリジェンスなどが紹介されている。各領域に相当する事例も豊富に盛り込まれているので、それらの類型の理解も促進される。さらに、本書では、問題解決レベルから脱却し新しいビジネスを創造するといったビジネス革新をデザインするために必要となる分析シナリオ類型も整理されている。また、そのための鍵についても言及されている。これらの点は業務やビジネスの革新に対する指針を与えるという意味で、ビジネスパーソンにとって有益であろう。著者らは、ビジネスの現実を、情報 (データ) に基づいて客観的に語る、あるいは、情報に語らせる、ということを繰り返し主張している。ビジネスインテリジェンスはまさに「知的情報活用」の実践であり、ビジネス『革新』への足がかりである。

本書は、販売促進会議というリアリティ溢れる場面の描写からはじまる。そこで繰り広げられる会話……まるで小説のようであり一気に引き込まれる。数式は一切見あたらない。その一方で、OR や経営工学、経営システム科学の分野になじみの深い用語が次から次へと登場する。読んでいて楽しい。また、本書を通読することで、ビジネスインテリジェンスを俯瞰することが可能となる。すでに述べたように、情報活用の分析類型が整理されているので、ビジネスパーソンにとっては、課題に遭遇した際にも必要となる解決手法を把握することができる。参考文献などの情報が追加されれば、さらに実践が可能となるだろう。数理的な理論の修得に価値を見いだせない学生には、いずれ飛び込むビジネス現場での数理的理論や方法の意味を理解するきっかけを与えてくれる。ぜひ、手にとっていたいただきたい。

(猿渡康文)